

		最 終 評 価			
		経過・達成状況		評価	次年度に向けての改善方策
1 社会で 生き抜く 力を身につける	① ②	幼稚園部	・経験をもとにした自分の思いや考えを伝える活動を繰り返し積み重ねてきたことで、ことばの定着や表現内容の拡がりが見られる。幼児同士のやりとりが増えてきているが、まだ十分とは言えない。 ・絵本の読みきかせで、話の内容を理解し、絵本の世界の面白さを感じながらきいている。自分で手にする本のジャンルも多様化しつつある。		B ・絵本の読みきかせなどの際に、感想を言う場面や途中で次の展開を想像させる場面などを意図的に設定し、お話を通してのやりとりを進める。
		小学部	・学習の中でめあてを位置づけることで、めあてを意識して取り組んだり、学習後に本時の学習がどうであったか自分で振り返ったりすることが増えてきた。 ・児童の実態に応じた学習環境を整え、児童への支援の共通理解を図ったことで、どの学習でも同じ支援で進めることが増えてきた。そのため、学習の積み上げを確実に行えるようになった。		A ・めあての提示やふりかえりのしかたを児童にわかる形にしたり、見通しが持ちにくい場面ではスケジュールを用意したりするなど、一人一人が安心して学習や活動に取り組める手立てをさらに充実させていきたい。 ・児童の実態や支援についての共有をこまめに行い、同じ方向性で指導・支援ができるよう、共通理解の場を設定する。
		教育研究部	・研究グループや学部内で幼児児童一人一人の実態や指導・支援の方法につて丁寧に共通理解を図ることができた。幼児児童のことばやコミュニケーションの拡充や定着につなげることができた。 ・参観ウイーク、鳥聾・ひまわりスタンダード、一人一研究授業や聴覚障がい教育に関する研修会の充実により、教職員の専門性や指導力の向上につながった。また、中国地区ろう教育研究会自立活動サークルを開催し、中国地区の聾学校の教員とつながり、研究会を実施できたことで、様々な学びを得ることができた。 ・自立活動指導プログラムを活用し、自立活動の指導計画作成や指導の実際に活かすことができた。幼児児童一人一人について、自立活動指導プログラムを用いて、指導内容の達成状況をチェックすることで、個の強みや課題について把握し、適切な目標設定をすることができた。		A ・幼児児童一人一人に応じた指導・支援の在り方を全教職員で共通理解できる機会を設ける。授業を見合える機会を大切にして、引き続きことばやコミュニケーションの向上を目指し、取り組んでいく。 ・参観ウイーク、鳥聾・ひまわりスタンダード、一人一研究授業や聴覚障がい教育に関する研修会を充実させ、聾学校教職員としての専門性を高める。 ・系統立てて見通しを持った指導に役立てるように、自立活動プログラムを随時活用していく。
2 こうな りたい 自分・夢 をもつ	③ ④	幼稚園部	・自分から進んで取り組む様子が見られ、自信を持って活動をするが増えてきている。また、友達とのかかわりも活発になっている。 ・誕生会での「大きくなったら〇〇になりたい」の発表を取り入れたことで、将来の夢を持ったり、いろいろな職業についてのイメージが深まったりする様子が見られた。		A ・興味を持てるような環境や豊かな体験活動を設定し、自分でしようとする姿を称賛し、自信や積極性が育まれるようにする。また、過支援にならないかかわりや丁寧なやりとりについて共通理解を図る。 ・「〇〇ごっこ」などの遊びに様々な職業を取り入れたり、あこがれを感じる働く姿や手本となる大人の姿を紹介したりする機会を設ける。
		小学部	・教師が、友達や他者との接し方の見本をしめすことで、友達を意識して、肯定的なことばかけが増えた。また、児童の作品や学習の成果を掲示することで、認め合う姿も増えてきた。 ・自分の係活動などの役割を意識して主体的に取り組むことができた。		A ・「自分を大切する・自分を好きになる」気持ちが高まるように教師が子どものありのままを認め、肯定的な関わりを積み重ねていく。 ・通信や掲示などで子ども達の学びやがんばりをさらに発信するなど認められる環境を作っていく。
		支援部	・教育相談活動中に親子でやりとりをして絵日記をかいたり、絵日記を手がかりに担当者に話をしたりする時間を設けた。それによって、保護者の絵日記への理解（かくことの意義やかき方等）が深まった。 ・保護者研修プログラム（きこえ・ことば・子育て・手話等の内容）を本校支援部と合同で作成することができた。		A ・家庭でも絵日記の取組が定着するように、それぞれの家庭に合ったかきやすい方法を提示する。 ・作成した保護者研修プログラムをもとに研修会を実施し、内容を検討・改善していく。
3 あきら めない 体力・気 力	⑤ ⑥	幼稚園部	・毎日のリズム遊び、サッカー教室や運動などで体の動かし方が上手になったり、自由あそびで鬼ごっこやかけっこ、遊具などでしっかりと体を動かしたりする様子が見られた。		A ・縄やボールなどからだづくりに使う道具をいつでも手に取ることができる環境を整備し、遊びの中で「つかむ」「なげる」「とぶ」などのからだづくりの基礎を培う機会を増やす。
		小学部	・児童が好きなダンスを見つけたり、踊ったりするなど楽しんで取り組むことができた。また、家庭でも体力づくりのダンスをする姿も見られた。 ・ラジオ体操の評価やひまわり発表会の発表などが保護者や地域への理解啓発につながった。		A ・来年度の児童（1年、2年、4年）を想定して、体力づくりの時間・内容などをさらに検討していく。
		健康安全部	・各学部が体力づくりに積極的に取り組み、休憩時間に中庭等で遊ぶ姿がよく見られた。「ひまわり にんじゃ」の遊びを紹介し、教員も一緒に楽しみながら広げていく試みをしているが、効果が出るまでには至っていない。 ・新型コロナウイルス感染症の流行は収まらず、体力づくりをねらった地域のイベントの開催は少なく、保護者への紹介に至らなかった。		B ・子どもたちが体をしっかりと動かすことができるように、発達年齢に合った遊びの工夫や、しっかりと遊べる時間をもっと作っていく必要がある。 ・地域の体力づくりイベントや親子でできる体操等の情報提供を継続していく。
4 キャリア 教育の推 進	〇〇関係者との画 連携意識	支援部	・年5回の難聴特別支援学級担任情報交換会では、一部の担任であったが積極的に参加され、実践された学習内容や支援方法について活発に意見・情報交換をすることができた。 ・研修や勉強会等で最早期の教育相談の内容について理解を深め、初回相談での保護者への配布資料等を整理しまとめた。		A ・来年度も今年度と同じ方法と回数で難聴特別支援学級担任情報交換会を実施する。会の開催について事前に電話やFAXで知らせ、参加を促すようにする。 ・センター的機能の充実を図るために、最早期の教育相談について、他学部の教員にも情報を伝え理解が深まるようにする。
		キャリア部	・キャリア教育だよりの定期発行や校内掲示板を活用し、キャリア教育に関する各学部の取組や、卒業生、きこえないきこえにくい人の就労や活動について紹介し、保護者へのキャリア教育への意識向上を図った。 ・今年度新しい書式となった個別の教育支援計画について、保護者と話し合って作成し、支援会議の資料として活用した。また、本人や保護者のニーズ等の把握のためにアンケートを実施し、キャリア教育への意識向上を図った。		A ・引き続きキャリア教育だよりの発行や懇談などを通して、保護者に幼児児童の将来のイメージやキャリア発達について理解を図る。 ・個別の教育支援計画を支援会議等で活用をするとともに、より有効な支援につながるように研修を行う。
5 業務改善 の推進	(1)削減目標の 達成 (2)運営の 見直し	・月2回の「早く帰らあデイ」を行うとともに、衛生委員会で月ごとの振り返りを行い、自分の体調管理や仕事のバランスについて振り返り考える教職員が増えた。7月・8月・1月に「月40時間以上の教職員が0%」を達成した。 ・新しい校務分掌表に基づいた担当からの提案や働きかけ、ふり返りがスムーズに行われていた。コロナ対応による計画変更等を臨機応変に対応し、協力して乗り越えることができた。教職員間の情報交換や確認を企画会議等で確認しあい、より円滑な運営をすることができた。		A ・職員全員で健康管理の意識を高め、よりよい教育実践につながることを日々振り返り確認し、お互いに声をかけあう職員集団づくりを行う。 ・行事の見直しを含め、事前の計画的な業務の推進を図り、行事等で時間外勤務が増えないようにする。 ・職員朝会時やグループボード等を使って日頃から情報共有を図ると共に、企画会議を定期的に設けて各学部の運営状況や全体の動きを事前確認等して円滑な運営をする。	